

2. 教員の意識調査から

2010年8月24日の校内研究で実施した「本校教員の意識調査アンケート」から、研究開発中の教員の意識の変容に特徴が見られるデータについて分析し、変容が顕著な項目を中心に以下のようにまとめた。○で囲まれた数字は、質問項目や回答データの表に対応している。

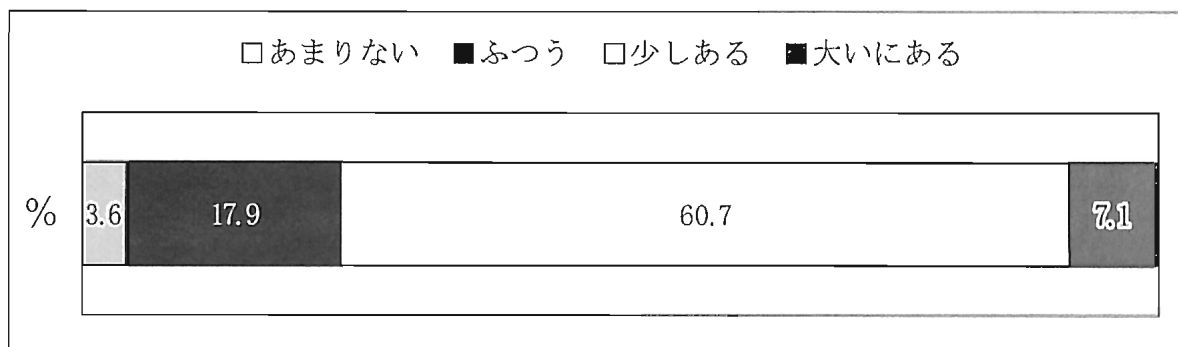
<教職員の構成>

本校は、国立大学法人お茶の水女子大学附属小学校として、公教育の役割を担うとともに、教育課程の先行的研究や教育実習生の受け入れを責務としているため、一般の公立学校とは教員の採用規準が異なる。教職経験年数では、20年以上のベテラン教員が約6割近くを占めているのに対して、教職経験5年未満の若手が1人(3.6%)であり、高齢化の傾向は否めない。また、本校での経験年数では、5年未満の経験者数が3割を超え、本校経験年数における中堅、ベテランとの割合は均等である。この実態や学習分野の構成人員を踏まえて意識調査結果の分析を行った。

I 研究課題：「公共性」を育む「シティズンシップ」への取り組み

(1) 全体計画

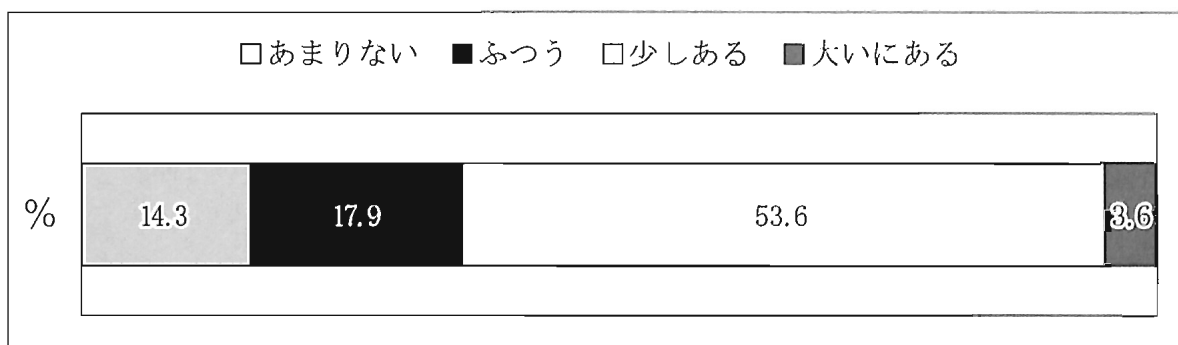
① 3年前と比べてシティズンシップ教育の内容・方法に自分自身の教育方針をもてるようになった



①から教員の「シティズンシップ教育」に対する関心や理解の向上を認めることができる。「少しある」を含め7割近くの教員が「シティズンシップ教育」を肯定的に捉え、自分自身の教育実践と関連させて教育方針づくりに取り組んできたと考えることができる。

(2) 教育課程

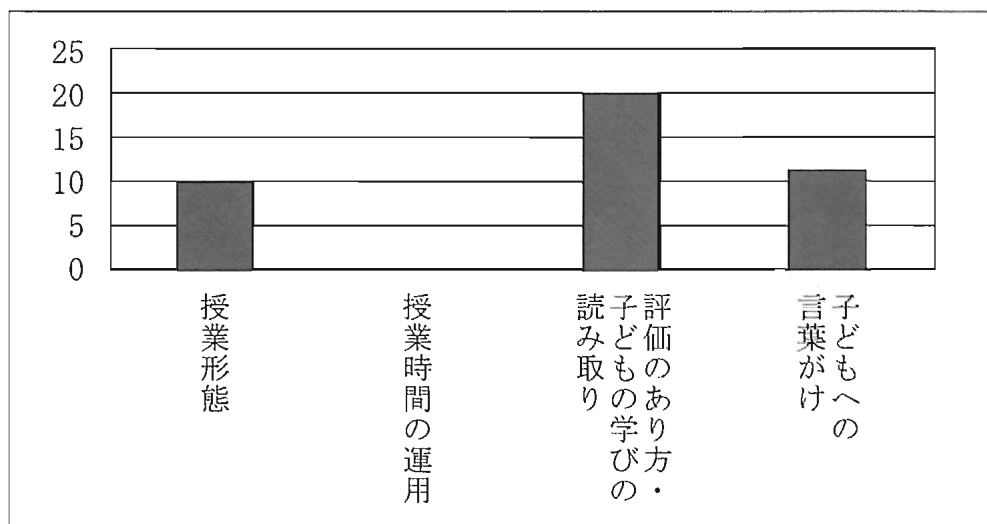
② 3年前と比べてシティズンシップ教育について学習分野における自分自身の教育活動の質が向上した



②では、「大いにあるが」が①の半分になり、「あまりない」が4倍に増えている。これは、「シティズンシップ教育」という研究主題の大きさが魅力として意欲を喚起させた反面、学習分野の内容に網羅的に研究主題と対応させることの困難さに起因していると考えた。このことは、研究の過程における議論でも多く聞かれた声である。

(3) 指導方法

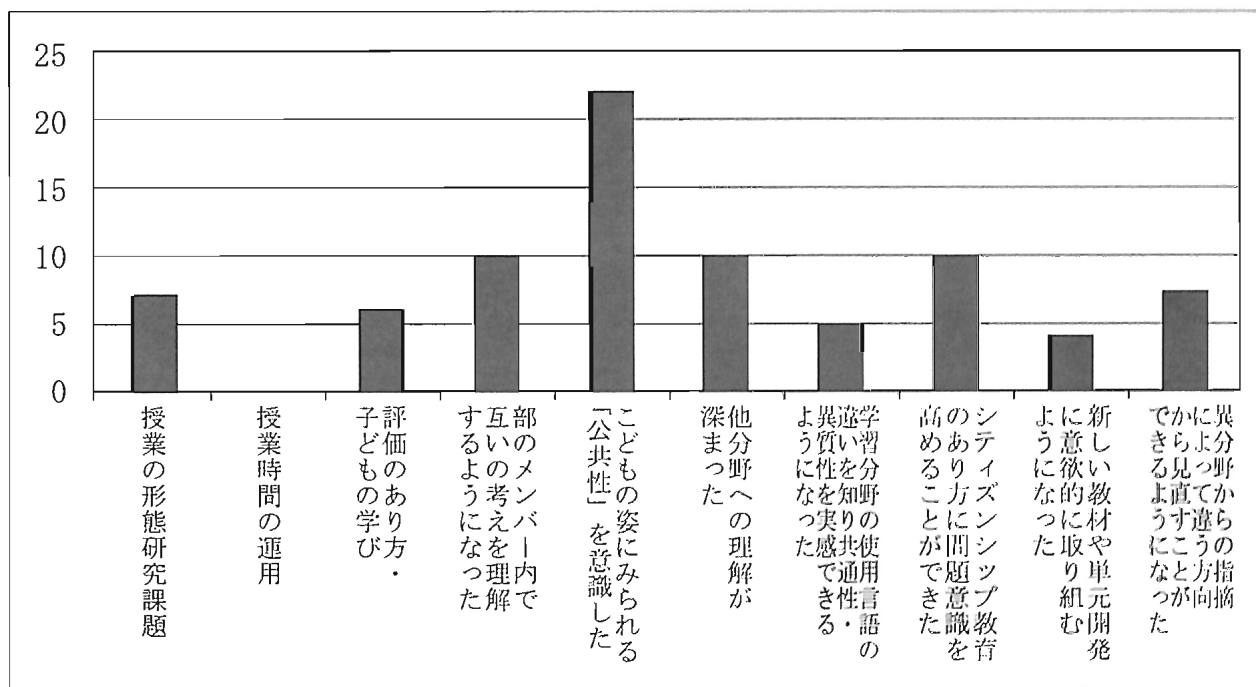
③ 『学習における「公共性」育成プラン』に基づく実践によって指導方法のどのような点が改善されたか



③は、本研究で大切にしてきた「子どもの学びの姿の読み取り」について、7割以上の教員に意識化が進んできたことを示している。表裏一体の関係である指導と評価について、常に「子どもの学びの姿の読み取り」に立ち戻ることを意識的に行うことが、「授業形態」や「子どもへの言葉かけ」の工夫へと連携していく授業改善の基本が教員に定着した表れとして捉えることができる。

(4) 成果の重点

④ 『学習における「公共性」育成プラン』の作成は研究課題との関連において成果は特にどこにあると思われるか

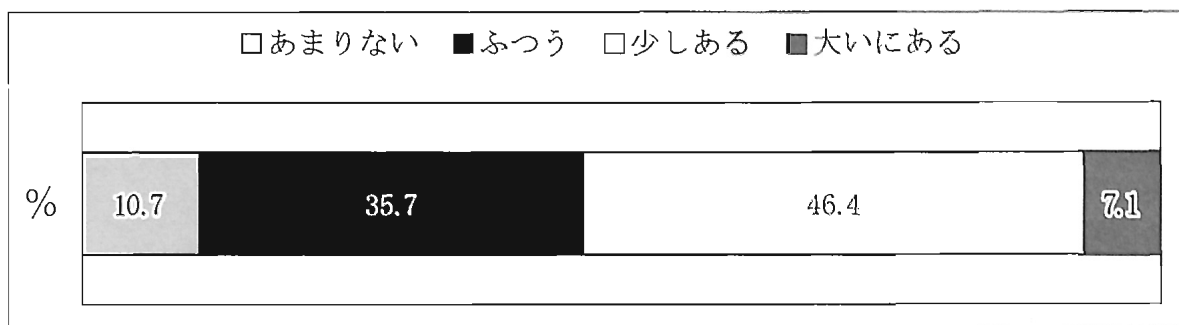


④は「学習における『公共性』育成プラン」を作成する際に、各学習分野の学習全体計画の見直し、学習内容の系統性や配列について研究課題に即した再編成を行う過程で、ほぼ8割近の教員が「子どもの姿にみられる『公共性』を意識した」ことを表している。本研究において、「子どもの姿」に注目することを常に教育活動の基本とする姿勢が本校教員に定着してきたことをこのデータからも読み取ることができる。

II 研究開発の内容

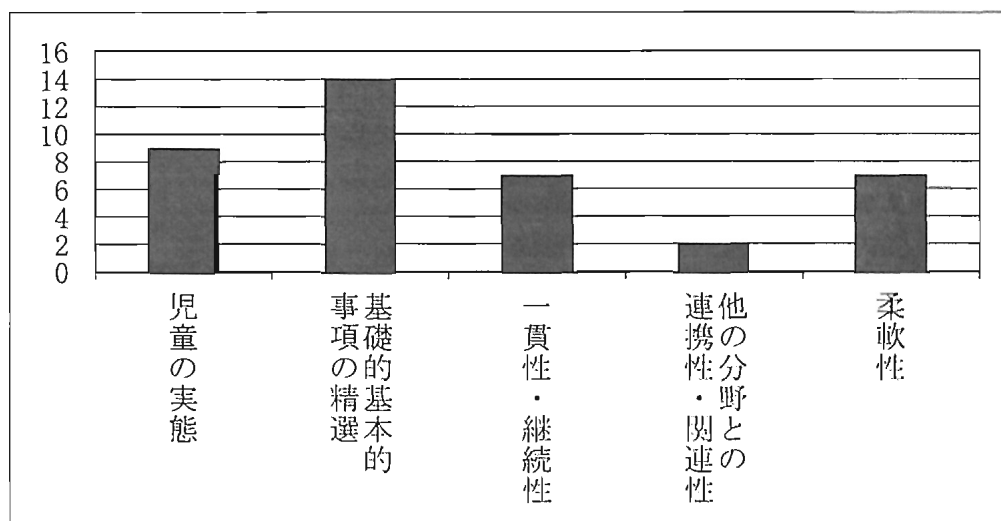
(1) 教育課程

⑤ 研究課題に即して特色のあるものとする事ができた



⑤について肯定的な回答が全体の半数にとどまっていることから、研究主題と実践の結びつきの難しさを表していると考えられる。

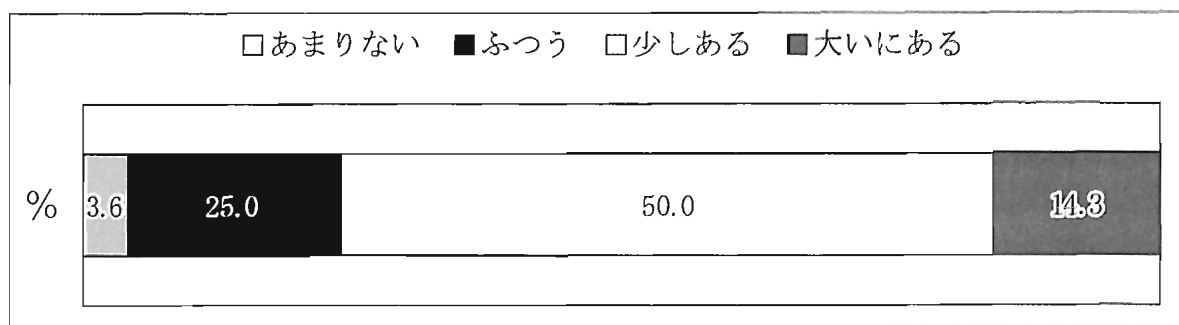
⑥ 教育内容の構成は次の観点から適切だったか



⑥では「基礎基本的事項の精選」を教育内容の構成の観点として半数の教員が回答している。それと比較して、他の観点からの教育内容の構成に対する反応が不調であることは、各学習分野の内容の特性によって研究テーマと関連付けることの難しさを表していると考えられる。特に他の分野との関連性・連携性や柔軟性といった本校研究の継続的な研究課題についての回答が低調であることは、本研究の大きな課題である。

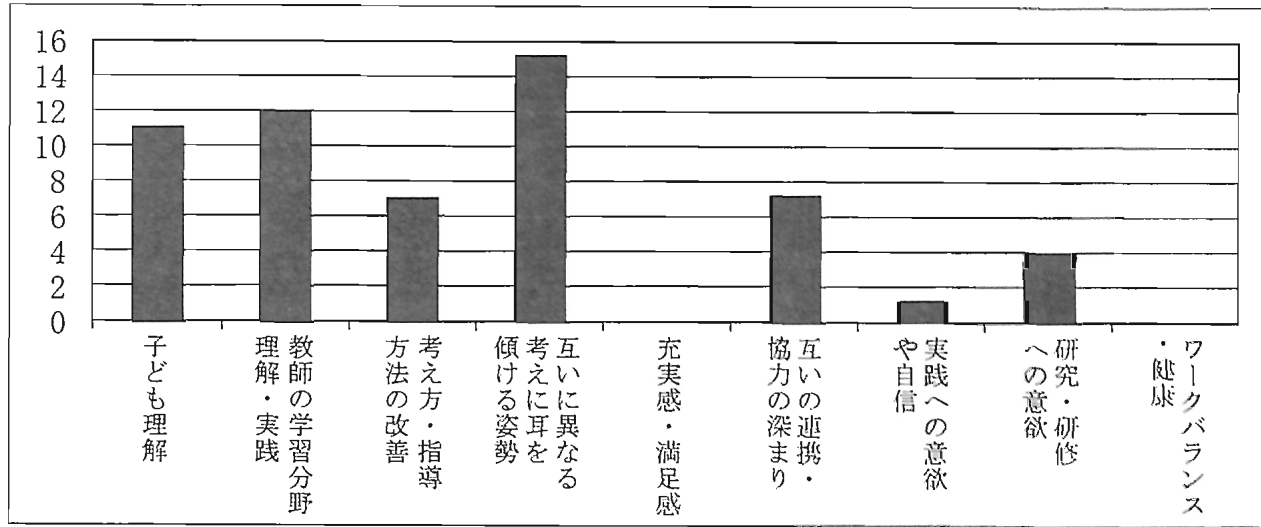
(2) 学校運営

⑦ 教員集団の認識や態度は変化したと思うか



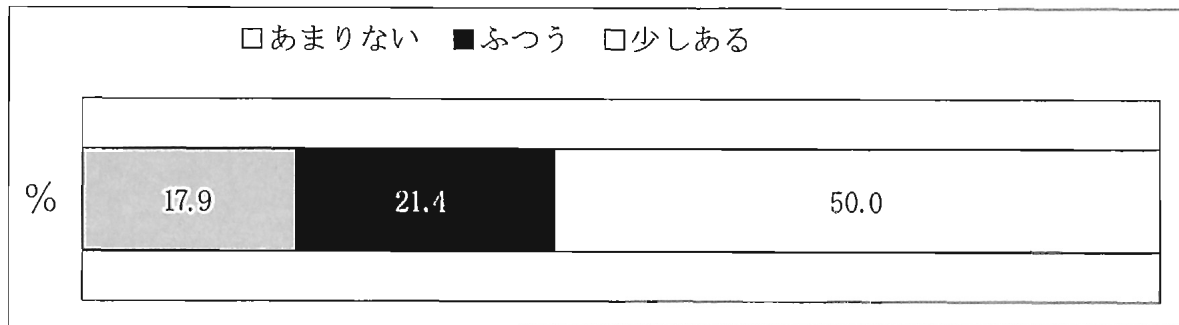
⑦では教員集団の認識や態度の変化が「大いにある」に4名回答があり、「少しある」を含めると7割近い肯定的な回答となっている。本研究成果の基盤を支える実態と考えられる。

⑧ 教師への効果：具体的に変化が見られたのは次の観点のうちのどれか



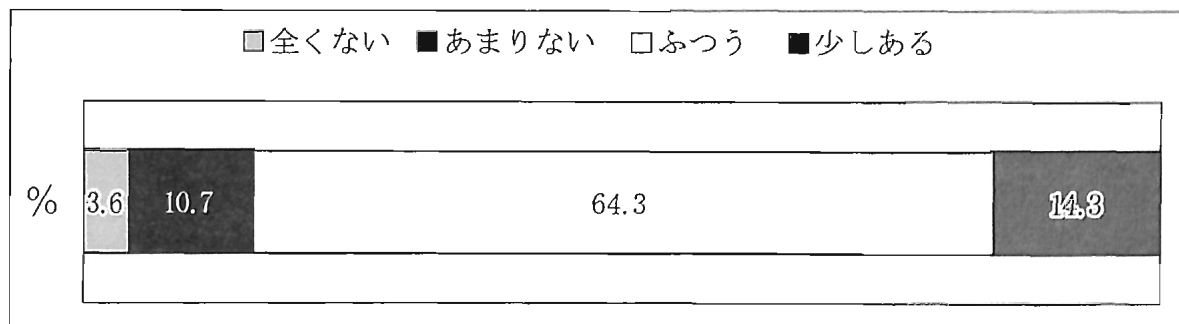
⑧の「互いに異なる考えに耳を傾ける姿勢」に15名もの回答があったことは、本研究により教員の公共性リテラシーが向上した証拠と言える。合わせて「子ども理解」「教師の学習分野理解・実践」について肯定的回答が多くみられることも、本校教員の教育活動の基盤となる意識が象徴されていると考えられる。

⑨ ねらいに対応した子どもの変容が見られた



⑨の子どもの変容では3段階で「少しある」が半数回答だったのに対して、「あまりない」が5人回答している結果は本研究の難しさを象徴している。子どもに育った力、育たなかった力について再度考察する必要がある。

⑩ 保護者の関心・理解・協力により変化は見られたか



⑩の項目は学校運営を支える基盤の一つである。「少しある」「ふつう」の回答が7割以上であることは、基本的に保護者からの信頼によって学校運営が支えられている環境を示しているとも捉えられるがその環境に甘んじることなく、子どもの変容を通して、保護者の信頼を一層厚いものにしていく指標として自戒的に捉える必要があると考えている。